

〔研究ノート〕

ナンシー・ヒューストンの『草原讃歌』

——自動翻訳文学の波紋と母語神話の崩壊——

真 田 桂 子

はじめに

文学史をひもとけば、すでに、ベケット、ジョイス、ナボコフをはじめとし、自ら出自の言語と文化を転換し、いわゆる「母語」とは異なった言語において、独創的な創作活動を行った著名な作家たちの名前を思い起こすことが出来るであろう。しかし彼らの作品は、文学史上異彩を放ちながらも、どちらかと言えば異端に属するものとみなされてきた。

一方、民族、言語、領土といった、これまで当然のように国家の枠組みを支えてきた諸要素の一体性がきわめて曖昧になってきた今日、やもうえず、あるいは自らすすんで、出自の言語や文化と距離をとり新しいそれを選び取る生き方は、それほど特異なものではなく、むしろすぐれて現代的なあり方とみなされ始めてきたかもしれない。

ナンシー・ヒューストン¹⁾は、間違いなく「文化移転」を行ったそうした作家たちの系譜に組み入れられる一人であろう。ヒューストンはカナダの英語圏に生まれ、その後フランスに移住して、今日、英語とフランス語の二言語できわめて旺盛な創作活動を行っている。ヒューストンは、1993年に、長らく離れていた故郷のアルバータを舞台にした小説『草原讃歌』²⁾を発表する。とりわけ注目されるのは、この作品が当初英語版で発表され、作者自らがフランス語に「翻訳」というプロセスを経たことである。そしてそのフランス語版の作品が、カナダ文学界最高の荣誉である総督大賞を授賞する。しかし、その授賞の正当性をめぐり、ケベック文学界を中心に激しい論争が巻き起こる。このいわゆるヒューストン論争は、一義的な意味において自動翻訳文学の正当性を問いかけながら、同時に言語や文化との不一致を生きはじめた文学と共同体との関係を象徴的に浮き彫りにしていると思われる。

この小論では、ヒューストンの『草原讃歌』を中心に、作家と作品について概観したのち、ヒューストン論争をおおまかに追いながら、アイデンティティにおける言語や文化との不一致が伸展していく今日の状況において、自動翻訳文学³⁾がもたらした波紋について検証したい。

1. ナンシー・ヒューストンと文化移転

ナンシー・ヒューストンは、1953年、カナダのアルバータ州カルガリーに生まれた。父はプロテスタントの牧師で、母は科学者であった。彼女が6歳のとき、家族に大きな不幸が襲う。まだ幼い兄と姉、ナンシーの三人の子供を父親のもとに残し、母が家を去ってしまうのである。この事態はその後のヒューストンの人生を決定づけたといっても過言ではないであろう。事実ある雑誌のイン

タビューに答え、ヒューストンは次のように述べている。

子供時代に、私は大きな不幸に襲われました。(…)家族から、私自身の言語から、それまで生きていた世界から身をひきはがす必要があったのです。それらに大きな距離をおく必要があったのです⁴⁾。

ヒューストンは、1968年に家族とともにアメリカへと渡り、高校を経て大学に進学する。大学時代は輝かしい成績を収めフェミニズムや学生運動に熱中する。その後フランスへと移住し、彼の地でロラン・バルトに師事しセミオティック（意味論）を学ぶ。その後、夫となるツベタン・トドロフと出会って結婚し二人の子供をもうけている。その頃よりフランス語で活発な創作活動を展開し始め、すでに十数冊の小説やエッセイを発表している。

さきに述べた家庭的な事情が、ヒューストンを文化移転へと向かわせた決定的な要因であったとしても、それ以外にも文化移転を促したいくつかの重要な要因が考えられる。ヒューストンは、後に、夫と子供とともに生まれ故郷のアルバーターを訪れ、その数週間の滞在中における考察を、『曖昧な愛国主義のために』という短いエッセイにまとめている。それを読むと、ヒューストンがいに故郷アルバーターの「文化」そのものに懐疑的であったかが理解できる。

私に言わせれば、英系カナダにおいて本質的なものとは、そのおそろしいくらいの味気なさである。(…)「カナダ人であるとは、一体どういうことなのだろうか」突然やむにやまれず、そんな問いかけが浮かんできた。無味乾燥な味気なさに自己同一化することなど、果たして可能であろうか？「私はカナダ人です」と胸をはって言うとき、一体、何を主張していることになるのだろうか？⁵⁾

ヒューストンはさらに、カナダ人はとりわけ過去への愛情や、歴史を重んずる気持ちを欠いていると指摘して、建築物における配慮のなさや醜悪さ、料理のメニューのオリジナリティーのなさなどをあげながら、英系カナダ文化の「無価値さ」について考察をすすめている。さらに、カナダ人の言語的発想には、少しもアイロニーや、悪、悲劇などが入り込む余地がないことに、深くいらだつとも述べている。しかし、カウ・ボウイやアメリカン・インディアン、民族衣装をまとった移民たちが華々しいパレードを繰り広げる西部きつての祭りであるスタインベッドに対しては、一抹のノスタルジーを禁じえないと述べながら、カナダの象徴とも言えるロッキー山脈などの大自然に対しては、それを見て一瞬気持ちが高揚することがあっても、深く感動することはないと言う。ヒューストンは、自らの出自の文化に対して冷やかな批判をくりひろげている。

このように、もともと彼女自身が英系カナダの文化に対して抱いていたコンプレックスや悲観的な見解も、ヒューストンを文化移転に向かわせる大きな要因として働いたと思われる。

一方で、たまたまルポルタージュを行ったハイチ系ディアスポラの人々のなかに、自らの曖昧にならざるを得ない愛国心とは対照的な、燃え上がるような愛国心を見いだして強く心を揺さぶられている。

ハイチ人の愛国心の強さと美しさには、心から驚嘆させられる。それにしても、なんと逆説的なことではないか。客観的に見れば、政治的、経済的に、カナダとハイチとでは、それこそ天国と地獄ほどの違いがある。それなのに、世界各地に離散したハイチ人たちは、

それぞれの土地でハイチの伝統を守りつづけ、惜しみない忠誠心を表している。私自身を振り返ってみれば、祖国カナダへの思いなど取るに足りないものでしかないというのに⁶⁾。

また、アメリカン・インディアンの居留地を訪れた際には、白人支配の欺瞞から、みじめな生活を強いられているあり様に大きな同情を寄せている。

居留地からは、崇高さと大いなるわびしさとが同時に立ちのぼってくるようだった。(…)様々の見かけ倒しの催しは、実は、ここには何もすることがない、という事実を隠蔽しているに過ぎなかった⁷⁾。

ヒューストンは、新世界において、剥奪されたインディアンの権利や生活を思いやるとともに、白人の祖先たちがどのようにこの地を切り開いてきたかも振り返る。そして、征服されたものと征服したもの、その両者の立場にたちながら、次のように述懐する。

いつになれば、あの大殺戮への罪悪感が薄れ、この地の文化遺産をわれわれのものとして主張する気持ちになれるだろう。(…)しかし、この新世界において、入植者の子孫として、この居心地の悪さはある意味で当然のことではないだろうか？ このような曖昧な気持ちを持ち続けることが、世界の各地で燃えさかっている愛国主義より、むしろずっと健全だといえるのではないだろうか⁸⁾？

『曖昧な愛国主義のために』からは、このように、カナダの歴史そのものを振り返る姿勢が読みとれる。

ヒューストンは、1986年、病に伏したことを契機に、それまで久しく帰ることのなかった故郷へと帰郷する。『草原讃歌』は、このときの体験から生まれたとされている。この小説において、ヒューストンは、文化移転の果てにたどりついた地平から、もう一度故郷を蘇らせるとともに、曖昧なる愛国心の醒めたまなざしのもとに、西部のもうひとつの歴史、白人やカトリック教義の欺瞞のもとに隠蔽されていた、インディアンたちによる歴史を浮き彫りにしようとするのである。

2. 『草原讃歌』 ——蘇える故郷と白人神話の終焉——

物語の構成は、孫娘の Paula が、すでに亡くなった祖父 Paddon の人生を、彼が残した草稿の断片をつなぎ合わせながら追想する。あたかも草原をわたる風の唄のように、過去からの声が立ちのぼり、失意のうちに終わりをつけた一人の男の人生が、西部の情景とともに蘇る。企てた仕事も、家族との関係においても挫折して、何一つ思うようには運ばなかった人生で、それでも一つだけ彼の命を輝かせたものがあるとすれば、それはアメリカンインディアンの末裔である Miranda との恋だった。Miranda は、Paddon とつき合いはじめて間もなく、その長くはない生涯を終える。しかし、Paddon に、西部のもう一つの歴史を、白人によって侵害されたインディアンたちによるもう一つの歴史を語り伝えるのである。

リオタールが言うように、近代において信じられてきた普遍性の失墜とそれに伴う断片化をポス

ト・モダンの特徴の一つとみなすなら⁹⁾、近代において信奉されてきた直線的な時空間や歴史観の揺らぎとは、とりもなおさずその徴候の一つと考えることが出来るであろう。そして、構成とテーマを貫いてそのような問題を問いかけている意味で、この小説から浮かび上がるポスト・モダンな性質を指摘することができるであろう。

物語は、Paddon の死によって幕をあげ、直線的な時間のなかで出来事が描かれていくのではなく、解体された「時空間」のなかで進行する。父親との不和と屈折した生い立ち、敬虔なクリスチャンである Karen との結婚や家族との軋轢、西部一の呼び物スライムベットの喧噪や Miranda との出会いと目くるめくような至福のとき、それらはすべて断片と化して円環状の時のなかで描かれる。Paddon は、「時」の意味を問う論文を企図し、それを完成させることを夢見続ける。家族を養うために、高校で細々と嘱託の教師をしながら、決して完成されることのない論文を書き続ける。

…時の現象とは、どのような性質をもつのであろうか。それは具体的なことなのか、抽象的なことなのか？現実のことなのか、想像上のことなのか？普遍的なことなのか、文化的、あるいは個人的なことなのか？¹⁰⁾

Paddon は、時の意味について、記憶や歴史の意味するものを、真摯なまでに問いつづける。

猫は前進することができるかもしれないが、後ずさりしながら歩くことはできないだろう。しかし、私たち人間は、時を遡ることができるのだ。…人間性の所以は、そこにこそあるのでは。…我々は、過去のなかに現在を見だし、現在にありながら過去を生きることができるのだ。そして、目眩におそわれながら、未来に投機することさえできるのだ。

¹¹⁾

Paddon が、Miranda との出会いから得たもっとも貴重な贈り物とは、「生き生きと現在を生きる」手応えだった。そして物語を貫いて、生と死と、逃れ去る時間と書くことの意味、すなわち記憶に刻むことの意味そのものが、鋭く問いかけている。例えば、Paddon の残した言葉に、語り手の Paula は次のように問いかける。

パドン、あなたも今やミランダといっしょなの。過去の人になってしまった。あなたもミランダと同様に、私の書き残した言葉のなかでしか存在しない。…¹²⁾

書くことは、死者の声を聞き届けることであり、無を有にかえることであり、逃れ去る時に形を与えることなのだ。

Miranda との邂逅から、Paddon はもう一つの西洋的な価値観の見直しを余儀なくされる。それは、白人によって創られた西部の歴史の解体と先住民による新たな歴史の再構築であった。先住民の一部族ブラックフット出身の父親とメティスの母との間に生まれ、居留地で育った Miranda は、カトリックの教義にのっとった白人による征服と支配が、いかに欺瞞にみちたものであったかを告発する。それは先住民への啓蒙という名の抑圧であり、開拓の名を借りた搾取にこそ他ならなかった。

また、Paddon の妹の Elisabeth がカトリックの宣教師としてハイチに向かういくつかの挿話に

よって、先進国と途上国の状況が対照的に浮き彫りにされ、西洋の優越性が問い直される。

さらに、「白人の『時間』とは、進歩という神話に裏打ちされた直線的な概念であるのに対し、インディアンは『時間』とは、悠久のなかに流れる円環的なものなのだ」¹³⁾との Miranda の見解から、この小説の主要テーマである「時間」への問いかけは、ポスト・モダンな意識の反映であると同時に、西洋的価値観の問い直しと白人神話の終焉を象徴的に描き出し、ポストコロニアルな見地を表明していると考えられるのである。

3. 自動翻訳の波紋とヒューストン論争

ナンシー・ヒューストンの『草原讃歌』は、まず、*Plainsong* として英語の作品として発表される。しかしその後、作者自身によってフランス語に翻訳され、*Cantique des plains* として出版される。そして、そのフランス語版の作品が、1993年のカナダ文学界最高の荣誉である総督大賞（仏語創作部門）を授賞することになる。

しかし、とりわけケベック文壇を中心に、この授賞の正当性をめぐり激しい論争が巻き起こる。その発端となったのは、ナタリー・ペトロフスキーの記事の、罵倒とも挑発的ともいえる次のような言葉であった。

（ナンシー・ヒューストンは）アルバーターに生まれながらパリを偏愛し、母語を捨ててまでフランス語に同化しようとした強情でひねくれたアングロフォン作家にすぎない¹⁴⁾。

このナタリー・ペトロフスキーの見解は、いささカラシスト的ともいえるほど激しいものであったが、ケベック文壇にくすぶっていた不満を少なからず反映しているものだった。とりわけ、毎年、総督賞の仏語創作部門においては、ほとんどケベック出身の、フランス語を母語とした作家の「オリジナル」な作品が選ばれてきただけに、ヒューストンの授賞への反発は大きかった。ケベックの版元は連名で、「新たに審査員を選んで、総督賞にふさわしい作品を選び直す」¹⁵⁾ よう要請文を出したほどであった。その不満の主たる要因は、『草原讃歌』は、作者本人の手になるものであれ、あくまで「翻訳」された作品だから、というものであった。

この論争を通して浮かび上がってきたことは、まず、文学において、はたしてどこまでがオリジナルで、どこまでがコピーであるといえるのか。この二つを簡単に区別することが出来るのか。そして、今日、「翻訳」とは一体何であるのか、という点である。

ヒューストンは、この小説のフランス語版の成立の経緯にふれて、例えば次のように述べている。

Cantique des plaines は、*Plainsong* の単なる翻訳では決してない。それは、同じ内容をもった第二のオリジナルな作品なのだ。実際、私は、このフランス語版を創作するにあたって、英語版をもとにしながらも大幅に手を加え、何ヶ月もの間、さらに優れた作品となるように多大な労力を費やした。¹⁶⁾

すなわち、ヒューストンにとって、翻訳とは、単なる原作のコピーではなく、明らかに、新たな価値を付与するための創造的な行為であるのだ。今日、翻訳とは、単なる原作の移し換えではなく、「他者性との対話を通し、さらに原作を豊穡なものたらしめる」¹⁷⁾ 生産的で、創造的な行為と考え

られるのである。

結局、審査員の再選考と新たな受賞作品の選び直しを求める要求はしりぞけられ *Cantique des plaines* の1993年度の総督賞（仏語創作部門）授賞は取り消されることはなかった。審査員の一人である、マリー・ジョゼ・テリオーは、文学史をたどってみれば、『千夜一夜物語』に遡るまで、オリジナルとコピーを完全に分かつことなど出来ないことを引き合いに出しながら、次のように力説する。

ヒューストンやベケットやシオランや・・・あるいはテリオーやロワなどの作家たちは、結局、英語やフランス語やイタリア語、つまりそれらの言語で書いているというよりも、あくまで、ヒューストンの言葉で、ベケットの言葉で、シオランの言葉で、テリオーやロワのそれぞれに固有の言語において創造を行っているのである。¹⁸⁾

さらに、この論争を通して浮かび上がってくるものは、文学とアイデンティティ、そして制度をめぐる問題である。

すでに述べたように、ヒューストンの母語がフランス語ではなく、それが作者自らの手によって「翻訳」された作品であったことに、内容の善し悪しは別にして、ケベック文壇の一部の批評家たちの間からは、賞の授与に対する正当性が疑問視されるだけにとどまらず、嫌悪感すら伴った強い反発が巻き起こる。これに対して、レジーヌ・ロバンは、そのような抵抗が生まれる所以を次のように指摘する。すなわち、「ケベックにおいては、『雑種性』が入り込み、そのフランス系という血統が脅かされることが懼れられている」¹⁹⁾ というのである。さらにロバンは、文学と領土との制度的な関係について次のように考察する。

文学と領土は一体でなくてはならないというのであろうか。ケベック文学はケベック文学として、英系カナダ文学は英系カナダ文学として、それぞれ、正しく分類されなくてはならないというのであろうか。(…) 何よりも重要なのは、端的に言って、ヒューストンのこの作品がフランス語によって書かれたなかなかの傑作だということである。そのことを、一体誰が疑うことが出来るというのであろうか。²⁰⁾

一方、ヒューストンは論争のさなかに身をおいて、自らを次のように認識している。

つまり、私は決してフランスの作家になることはないであろうし、英系カナダ人作家になることもないであろうし、ケベックの作家になることもないであろうということである。私は、永遠にこのどうしようもない混淆を生きることになるであろうし、そのように存在することは可能なのである。²¹⁾

すなわちヒューストンは、いかなるアイデンティティの一致も見いだせず、幸福な融合も見いだせないまま、二つの言語のなかに生きるというあり方をそのまま受け止めようとする。そしてその曖昧な状況のなかにこそ、カナダ人としての証があるのではと問いかける。

ナンシー・ヒューストンの『草原讃歌』は、その物語において、カナダ西部の白人神話を塗り変えたとともに、その後の論争を通し、もう一つの神話、すなわち文学における「母語神話」をも崩

壊させたといえよう。それは、文化移転の果ての、脱領土的な地平から描き直された西部の物語であり、言語、文化、領土の三位一体の神話が崩れた時空に立ちのぼる、新しい想像力の羽ばたきから生まれた讃歌なのである。

注

- 1) ナンシー・ヒューストンの作品は、すでに日本でもいくつか翻訳されている。
『愛と創造の日記』高頭麻子訳、晶文社、1997年、380ページ。『天使の記憶』横川晶子訳、新潮クレストブックス、2000年、280ページ。
- 2) Nancy Huston, *Cantique des Plaines*, Actes Sud, Paris, 1993, 320.p 以下、この作品からの引用はすべてこの版から行う。日本語訳はすべて筆者自身による拙訳である。ラテン語の *Canticum* 《chant religieux》「宗教的な歌」を語源にもつ *cantique* を、讃歌と訳すことに関しては異論もあろうが、他に適当な訳語が見つからないため、この語を当てはめておく。
- 3) この自動翻訳という語は、後述するヒューストン論争において用いられた、*autotraduction* を訳したものである。すなわち作者自身が、原作を別の言語に移し換えることを意味する。
- 4) *Lire* 2001. 3, p.32-33.
- 5) Nancy Huston, *Pour un patriotisme de l'ambiguïté*, Fides/CETUQ, 1995, p.9.
- 6) *Ibid.*, p.9.
- 7) *Ibid.*, p.20.
- 8) *Ibid.*, p.32.
- 9) リオタールは、「…科学はみずからのステータスを正当化する言説を必要とし、その言説は哲学という名で呼ばれてきた。このメタ言説がはっきりとした仕方でなんらかの大きな物語——〈精神〉の弁証法、意味の解釈学等……に依拠しているとすれば、みずからの正当化のためにそうした物語に準拠する科学を、われわれは〈モダン〉と呼ぶとする。…極度の単純化を懼れずに言えば、〈ポスト・モダン〉とは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう。」と述べている。
- 10) Nancy Huston, *Op.Cit.*, 1993, p.41.
- 11) *Ibid.*, p.84.
- 12) *Ibid.*, p.79.
- 13) *Ibid.*, p.180.
- 14) *La Presse*, 1993. 11.18, article par Nathalie Pétrowski, “Bar Payant”.
- 15) *La Presse*, 1993.12. 3. article “Le mauvais prix a la mauvais personne”.
- 16) Corinne Larochelle, *Cantique des plaines de Nancy Huston*, Pallèle/Leméac, 2001, p.66.
- 17) Antoine Berman, *L'épreuve de l'étranger. Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*, Paris, NRF/Gallimard, 1984, p.16.
- 18) *La Presse*, 1993.12.10, article par Marie Josée Thériault, “Faux original et copie authentique”.
- 19) *Spirale*, 1994. 4. No.3, article par Régine Robin, “Speak Watt. Sur la polémique autour du livre de Nancy Huston”.
- 20) *Ibid.*
- 21) *La Presse*, 1994. 10.29. article par Danielle Laurin, “L'affaire Huston ou l'expérience du racisme”.

【付 記】

この論考は、2002年度カナダ政府出版助成プログラム、2002年度阪南大学産業経済研究の成果報告の一部である。
記して感謝の意を表したい。(2003年7月25日受付)